

紫溟吟社集 : 俳句 : 文苑

著者	千草, 李王, 千臭, 葬堂, 岸三, 渭南, 瓢郎, 子明, 敗荷, 秋皎, 珀雲, 卜道, ?耳, 錐栗, 戦車
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 2 2
ページ	5 8 - 6 0
発行年	1907-10-31
URL	http://hdl.handle.net/2298/6066

沙魚舟や風夕風きて釣惜む 全
 相促し歸支度や沙魚の人 全
 虫食みし蓼太集よむ夜長哉 全
 貝吹いて村の御講や秋の村 岸三
 漁火に五位鳴く岬を巡り鳥 全
 山晴の空に紫苑の高さ哉 全
 葉鶏頭石垣高く割木干す 全
 迷ひありく放れ犢や蕎麥の花 全
 秋の蚊をはたく隠元の拂子哉 渭南
 開山の節儉訓や抽味噌焼く 全
 青物の中に香爐や星祭り 全
 徳利に芒さしけり酒肆の椽 全
 くらがりの野に立つ我や虫の聲 全
 傍に火吹達磨や抽味噌焼く 瓢郎
 鶏頭や馬書いて歌仙燈籠干す 全
 乳を取る山羊小屋並び葉鶏頭 全
 團栗や土取りく跡の水たまり 全
 満潮の出島の外や錨引く 全

紫溟吟社例会々報

九月十九日第一回例会を九品寺に開く、作者十七人、選者十六人、岸三、二十五点、瓢郎二十三点、子明薺堂二十一点、李王十六点、敗荷渭南十三点、千草十点、千臭九点以下畧。入選の句より

映を出る馬の高荷や柿の畚 岸三
 朝毎に眠ふ驛や柿の秋 全
 豆東に乗せし篩やきりくす 瓢郎
 初汐や籠ながら魚を洗河 全
 阿迦棚に灯せば鳴かぬ蝉かな 子明
 山頂や霧吹杉の雨さなり 全
 蕤編むそのつれんや鳴子引く 薺堂
 水樓に月待つ宵の秋霧かな 全
 ぬすみ飲む酒冷たしやいことなく 李王
 山越の漁人に晴るゝ朝の霧 全
 青柿や荒楓なん風に雲ほやき 敗荷
 五反田に五つの繩の鳴子哉 全
 庵の灯の赤きに迫る夜霧哉 渭南
 蟋蟀砧の臺に飛びにけり 全
 溢柿に小猿の怒る可笑しさよ 千草
 初汐や峭這ひ上る岩の角 全
 麥刈れし畑の鳴子や赤蜻蛉 千臭

十月 日第二回例會(余根屋)運座一回宿題「稍寒三句」作者
 選者八人、岸三十四点、李王十三点、瓢郎十一点、敗荷八点以
 下署。入選の句より

柿が研ぐ砥石の水に木の實落つ 岸 三
 遠く見る踊や浦の七篠 全
 斧打てば大樹の木の實ほろ落る 李 王
 蓑虫に十日雨なき楢かな 全
 立板を滑る木の葉や稍寒し 瓢 郎
 堰の根に流れよりたる木の實哉 全
 石臼に氷黒すみて木の實落つ 敗 荷
 稍寒や燈にうつる人の顔 全

紫溟吟社東京支會

出入 慮うるさき袖の蝨哉 秋 皎
 梭音は丘の一家や蝨とり 珀 雲
 芋畑を出水の芥肥しけり 同 人
 芋の葉にかゝれて妹の浮名哉 卜 道
 天下晴るゝ山上の菴に芋を堀る 緑 耳
 山の水甘し芋の子眞白さよ 同 人

鍋蓋や芋の子一つ浮いてのる 錐 栗
 一つかみ蝨煎る火にくれ迫る 同 人
 蝨どぶや舟曳く人に稻深く 戰 車
 軒に積む稻や障子に蝨どぶ 同 人
 秋 雜

石ころは小さき陰ある月夜哉 錐 栗
 一繩は芒の中に鳴子哉 全
 倒懸の苦を蓑虫の鳴く夜哉 全
 稻を焼く軍に鳴子あらしけり 全
 夜半に鳴くは天井に棲む蓑虫か 戰 車
 椎の實や漁村に古りし妙見寺 全
 芋畑に壁落つるまゝの土藏哉 全
 團栗に句種拾ふや鳴く鳥 全
 一齊に嫁やれと囃す踊哉 全